

屋根でゆき交う。

人口減少時代において基本的なまちづくりのコンセプトとして多くの自治体で都市機能を集約する、いわゆるコンパクトシティへの取り組みがなされている。公共交通を軸とした都市構造であるため、LRTをはじめとした公共交通機関の整備、その沿線地区への居住推進といったことが主に求められるが、そんな流れの中で「公園の整備」が後回しにされることを予想した。しかしながら、コンパクトシティ政策が担保しきれない機能を公園が秘めている可能性は大いにある。そこで、既存の県庁前公園に富山県の「ありたい姿」への実現に向けた機能を追加した「新しい都市公園」を提案したい。



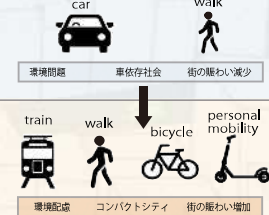
既存の公園の在り方

日本での公園は、1873年の太政官からの布達が出されて以来、人々のレクリエーションの空間、良好な都市景観の形成の場であっただけでなく、公園という施設の定義や制度が時代の流れの中で、変化、整備されていき、都市環境の改善、都市の防災性の向上、生物多様性の確保、豊かな地域づくりに資する交流の空間としての機能も後付けされ、今日の「公園」に至る。

現状1 交通手段 移動手段：車→自転車・LRT・自転車・徒歩

富山県の車の自家用乗用車ランキング 全国TOP3

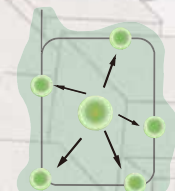
19.3% 高齢者における自動車免許保有率



車社会が色濃く残っており、賑わい減少が目立つ多様な移動手段の普及により社会的な賑わいを促す

現状2 中心性と波及効果

県庁前公園周辺に多くの観光スポットや主要エリアが存在する



歩行者、自転車利用者に迎合した空間が周囲とシームレスに繋がっていることで、脱車社会な都市が広がっていく。県庁前公園の魅力を高め、人を集めることで周辺のエリアにも人が流れていく。

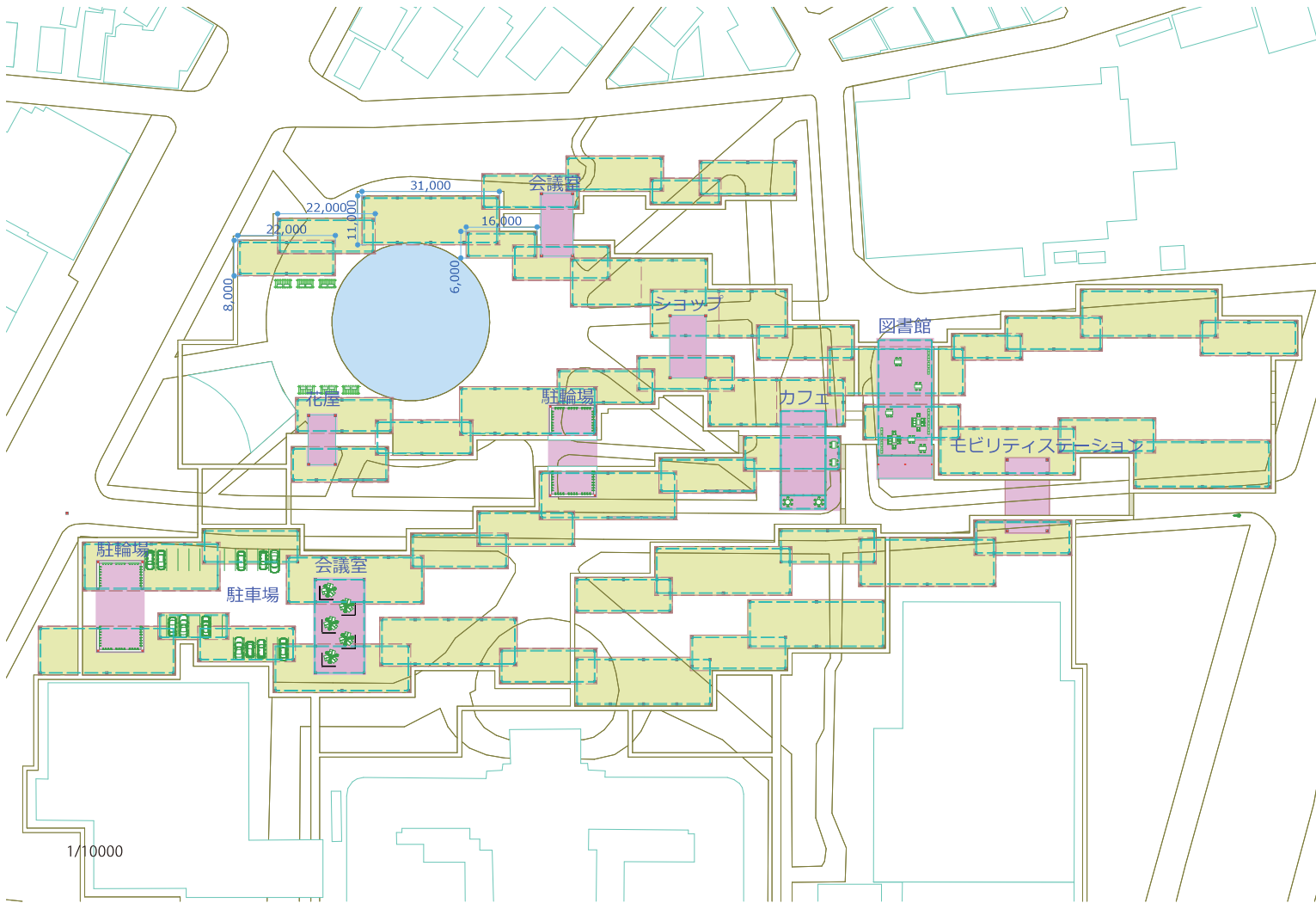
提案：これからの県庁前公園の在り方を考える

県庁前公園では、「県庁周辺エリア未来取りまとめに向けた論点整理」にもある通り、「閉鎖的で視認性がない」といった現状がある。また、その事が起因してか、駅周辺と商店街の人の流れを遮断してしまっているようだ。これらの課題を踏まえた上で、「開放的で、見通しの良い」公園でありながら、県庁周辺エリアをシームレスに繋ぎ、エリアの活性化を目指した「新しい県庁前公園」を次のように提案する。

屋根をかける

細長い屋根をかけることによって、小さな空間が生まれまた、活動の幅が広がる。積雪の見込まれる場所において冬にも活動できるスポットが求められていると考えた。

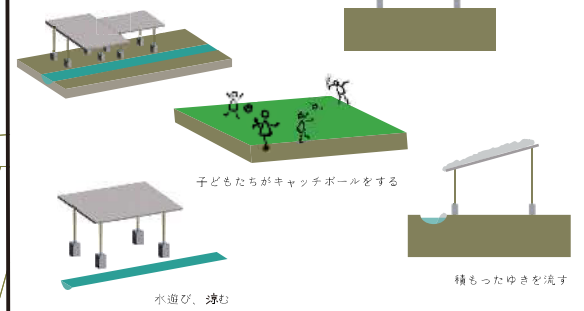




要素の集約

多様な人の居方を許容する
連なる屋根で雨の日さば

屋根の下で本を読む・会議をする・お店をする



動線に合わせた計画

駅と商店街の中心に位置する県庁周辺の計画人々の動線を短冊状の屋根で覆う
縦の字別生屋根は用途のある屋根とした

冬でも歩行空間を損なわないよう
屋根を配置することを検討した

